

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます

No.26 2009.5.15

第3号(昭和24年7月号)

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年は60年の年です。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

工 エンタツ 君、人間の身体はどれくらい値打ちがあるか、知っていますか？

ア アチャコ えっ。藪から棒に、いったい何を言い出すのや？

工 いや、これは事情を説明せんと分かんが、このわれわれの身体は自分のものであって、自分のものとは違う。

ア そうとも。心は自分のものやが、身体は親神様からの借りものや。

工 そこや！ ア どこや？ 物を探してると違う。

—— 借りものである以上、それがどんな値打ちのものか、知っておく必要がある。

ア なるほど、どんな大切なものをお借りしているか？

工 今の相場に直したら、どれくらいの金目のものか？

ア おい、ちよっと待て。人間の身体の値打ちがお金ではかれるか？

工 はかれるとも。早い話が、君の身体の皮。——それ、生まれた時のままやろう？

ア 当たり前や。まだいっぺんも張り替えせんと、ずうつと三十年から使ってる。

工 ホンに昔の物はやつぱりエエなあ。どうや！ 一枚皮で、どこも継いだれへんがな。

ア そない引つ張つたら痛い！

工 この大した一枚皮が、頭の先から足の先まで、全部君のものや。

ア それがいっただいどうしたんや？

工 さあ、近頃は靴の皮の相場が一寸角で大抵五十円や



ア えっ、僕の皮が、そんな、二万五千円！

工 どうや？

ア じゃ、この皮の中にある肉は？

工 そうやな。君の身体つぶして、肉が何貫目とれるやろ？

ア かしわみたいに言うな。工 まず、五貫目とれるとして、今の相場で豚肉が百匁二百円やから——

ア おい、僕、豚と同格か？

工 君の肉が全部で一万円。しかも、馬鹿にならんのは、全身に植えてある百七十万本の純毛——

ア なるほど。こら、純毛に違うないわ。

工 これを一本十銭と換算しても、十七万円の金目になる。

ア そう聞いたら、うかつに髭も剃れんな。

工 お次は、君の身体の中を流れる赤い血汐。——これはビタミンAからXまでのエキスやから、いくら安う見積もつても一級酒の百倍の値段

ア すると、一升で十萬円の勘定か。

工 続いて、全身には二百三十六本の骨がある。

ア へえ。本当かいな？

工 嘘やと思うたら、君の身体から骨を全部抜き出して、一本一本計算してみい。

ア そんなあほな。(後略)

秋田實(あきたみのる)一九〇五年一九七七現在の漫才の原型をつくった、上方を代表する漫才作家。二代真柱と旧制大阪高校同期生。

霧隠才蔵煙吹込の術

(かんたんな手品の種明かし)

ここに取り出しましたるガラスビン、ご覧の通り、すきとおりに、中には何もございません。どなたでもハンケチか手拭いをお貸し願います。(誰かから借りうけてビンの上にかぶせる)この上から煙を吹き込みますれば、この煙はたちまち布を越し、ガラスを通過して、ビンの中まではいつて参ります。(煙草をとり出し、点火して吸う。そしてその煙を二、三度、布をかぶせたビンに吹きかける)はい、ご覧の通り、ビンの中まで、もくもくとはいつて参りました。

はい、この煙はおもむろに散って行きます。(フタをとって布で煽ぐと、煙は四方に散って行く)種明かし

口上では種も仕掛けもないと言うが、実は大ありで、図のようにビンのフタの中にアンモニアを入れ、穴から出ないようにしておきます。そして煙を吹きかけるときにアンモニアが穴から下に落ちるようにかたむけるとアンモニアと塩酸がまじって、塩化アンモニアの白煙をあげます。アンモニアも塩酸も少量でいいので、ガラスを通して観客からはみえませぬ。



雨乞いづとめ

『教祖の御姿を偲ぶ 改訂新版』（上村福太郎著）から、「雨乞いづとめ」の様子を振り返ってみる。明治八年生まれの上島かつさんの、七十八歳の時の話。かつさんは、中山家の近くで生まれ育っている。

○ ○ ○ ○ ○
明治十五、六年ごろは、三島の戸数は七十軒ぐらい、庄屋敷は三十軒ぐらいの合計百軒ぐらいのもので、米と綿が主な農作物だった。日やけ（日照）の年は米はもちろん、綿のとれ高もがた落ちで、農家は必死だった。

——明治十六年の日やけはそのとうなもんやったそうです。（近畿一带大旱魃^{かんぼつ}）村の人たちは石上神宮へも三島神社へも何回となく願かけをしました（村の鎮守で三夜にわたって雨乞いをしたとの記述もある）。しかしながら、雨は幾

日も幾日も一しずくも降りません。そこでとうとう村の顔役が寄つて、夜ぶんにお屋敷に雨乞い願ひに出ました。すると教祖は、『雨降るも神、降らぬも神、皆、神の自由である。心次第、雨を授けるで』とおっしゃったそうです——

雨乞いの日（明治十六年八月十五日午後四時ごろから）、かぐら面を担ぎ、鳴り物を手こに、三島村の東南から順番に四隅で雨乞いづとめをして歩いた。すると途中から、かんかん照りだった天気が、手に届くような黒雲がうずまいてきて大粒の雨がすごい音をたてて降ってきた。どの田んぼも見ると水があふれた。このとき、田部の車返し（現在の東本詰所東南あたり）に「どえらい雷」が落ちたという。その結果、おつとめをつとめた者は、ずぶ濡れのまま腰縄などの姿で丹波市分署に連れて行かれた。その夜、教祖

も分署へ連れて行かれた。

——村の人たちは、「ええ雨降つてみんな喜んでるけど、おばあさんは気の毒や、申しわけない」と言いました——

教祖がお帰りの時、村の者も丹波市分署までお迎えに行つた。そして村の代表がお礼にお屋敷に伺うと、教祖は、『雨降つて結構や、そのかわり、私の言うこと聞いてくれるか、さあさあ講を結んでおくれ』という意味のことをおっしゃり、そこで村の人は講を組んだ、という。これが天元分教会のもとである。「むらかたはやくにたすけたい なれどこ、ろがわからいで」（四下り目 六ツ）と歌われた教祖の思いが、ここに一つの実を結んだのであろうか。警察に引つ張られることを覚悟で雨乞いづとめをつとめた先人の信仰者の素直さ、心意気が胸にしみる話である。（参考 『教祖伝参考手帳』）

「陽気」創刊 60 年記念出版

道の八十年

——松村吉太郎自伝——

初代真柱様との強い絆のもと 一派独立請願運動 教祖四十年祭 倍加運動など 天理教の歴史とともに生き抜いた信仰軌跡

改訂新版

松村吉太郎 著
（高安大教会初代会長）

四六判並製 400 頁
定価=1,680 円（税込）〒200

養徳社 出版

天理市川原城町 388
☎(0743)62-4503

<http://www.12.ocn.ne.jp/~youtoku/>

創刊 60 年記念懸賞小説募集

400 字詰 20 枚～25 枚
7 月 31 日（消印有効）

詳しくは、「陽気」5 月号
をご覧ください。

月刊雑誌 おおきな創刊60年

陽気

定期購読をお申込んだくと

◎毎月発売日にあわせてご自宅、お教会へお届けいたします。
◎買ひ漏れがなく、毎号確実にお届けいたします。

修養科修了、友人、知人、お世話になった方
へ 1 年間「陽気」をプレゼントしませんか。

お申込は
今すぐ！

〒632-0016 天理市川原城町 388 TEL0743-62-4503
FAX0743-63-8077 養徳社 陽気定期購読係まで

『創刊 60 年定期購読特別割引』

通常 半年分 1,420 円 → **1,300 円**
(税込・送料共)

1 年分 2,840 円 → **2,400 円**
(税込・送料共)

※特別割引は平成 21 年 12 月末日お申込分までとなります

養徳社 よもやま話

○……このごろ、木や山を見るのがとても楽しい。新緑の美しさに心奪われる。木や山が緑色であることに感謝したい。ところで、無残に枝を切り払われた街路樹がある。そんな木を見ると、思わず「ごめんなさい」とあやまりたくなる。

若葉を茂らせるこの時期に、人間の都合で枝を伸ばせない木々に申しわけなく思う。木は、何も言わなければ、もともと木の心を感じ取ってほしい。

○……このゴールデンウィークは、日ごろやろうやろうと思っていた部屋の大そうじ。これまで「これは大事なものと」残していたものを思い切ってみな捨てることにした結果、大きなゴミ袋が五つ出た。どこへも遊びに行かず、家にこもつての難事業で、かなり疲れた気分はすつきり。翌朝ゴミを出しに行ったら隣家のご主人も同じくゴミ袋をさげて日（いわ）く。「私が出さなかつたら、私がゴミとして出されてしまいます」

広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を「陽気」誌へ載せてみませんか？ 料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用いただけますよう、お願い申し上げます。

養徳社